日本と英国の文化交流

――寿岳文章を中心に――

中　島　俊　郎

京都西郊にある英文学者であり和紙研究家であった寿岳文章（1900-92）の居宅，向日庵には外国人と文通をかわした数多くの書簡類が残されている。それらの手紙には，戦前，戦後を通じて外国文化を吸収しつつ，日本文化をたえず発信しようとしていた一人の知識人のすがたがうかがえる。そうした書簡は大正から昭和へ，大戦を経て大きく変貌していく戦後日本の変遷を着実に反映させ，文化の側面を余すところなく伝えている。

駐日英国大使ジョン・ピルチャー（1912-90）と寿岳文章の交友は，文字通り戦前から戦後にまで及び，敵国として反英感情がたかまった戦争という悲劇をも越え，ゆるぎなく続いていった。ピルチャーは生涯を通じ，寿岳のことを「先生」と尊称し，敬愛の念をいささかもゆるめようとはしなかった。

両者の友情が中軸となって詩人エドマンド・ブランデン（1896-1974），D. J. エンライト（1920-2002）という新しい友人たちへと展開していき，さらに豊饒な文化現象をうみだしていくことになる。本稿の目的は，寿岳文章の異文化交流に視座をおき，向日庵資料ともいうべき新資料である，交換された数多い書簡にもとづき，日英の文化交流の実態をつぶさに検討し，追究することにある。

I　ジョン・ピルチャー

40年間以上に及ぶ外交官生活を引退するに際して，ジョン・ピルチャーは日本における外交活動を総括している。そのなかでピルチャーは日本および日本人とのかかわりのなかでみずからの周りに生起した出来事，体験をあげている。まず1930年代日本において狂気じみたナショナリズムの台頭に直面したこと，そして大戦間，中国本土での占領下における日本軍部の蛮行を目撃したこと，そして日本人の精妙な美意識にふれたこと（京都では神道を信奉する神社境内に住み，仏僧の前で座禅していた），マッカーサー司令官による占領後，日本が異常ともいえる経済成長をとげ経済大国になっていく経緯などをつぶさに観察し報告している[1]。文字通りピルチャーは日本の大きな転換点を体験したのであった。

出自　1912年，イギリス陸軍工兵隊の一員で，幹部候補生を養成する幕僚（参謀）大学の講師であった父親の子としてジョン・ピルチャーはパキスタンで生まれた。1921年，帰英しバースで生活したが，外国語が堪能であって欲しいと願う両親は，息子をフランスのノルマンディ地方に住む親戚にあずけ，またイタリア，オーストリアでも生活させた。結果，フランス語，イタリア語，ドイツ語を流暢にこなすようになった。やがてケンブリッジ大学クレア・カレッジに進学し，後の文学者，吉田健一，伊藤忠商事会長，伊藤栄一と出会う。だが，当時は日本に関心がなく，ビーグル犬を駆使して兎狩りにいそしむ日々をおくっていたという。

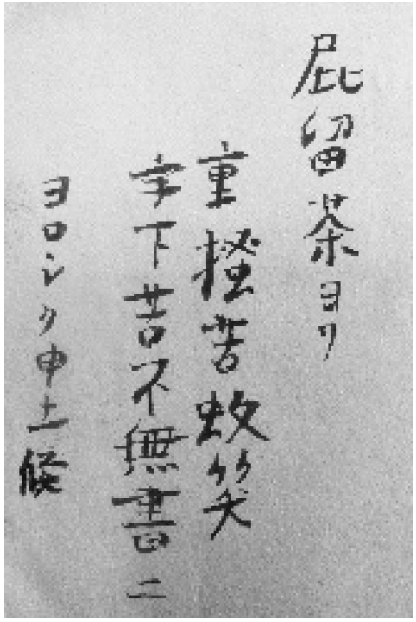
来日　やがて初来日したピルチャーは1936年２月，船旅で横浜に到着したが，皇道派青年将校がクーデターを起した二・二六事件に遭遇し，しばらく上陸を果たすことができなかった。その後，駐日英国大使館で私設秘書となり，日本学者ジョージ・サンソムと出会い，日本文化への関心を抱くようになる一方，ヨーロッパ文明に基盤をもつ自己を見出し，カトリック教へ改宗した。ピルチャーが日本にさらに親炙するようになったのは『源氏物語』の訳者アーサー・ウェリーの知遇をえたこと，そして外交官チャールズ・ノートン・エッジカム・エリオットやアーネスト・サトウの著述を通じてであった[2]。

京都の生活　ピルチャーは大阪の英国総領事館に勤務しながら，京都に住居をかまえ，相国寺の禅僧から日本語の手ほどきを受けた。鈴木大拙から禅の教義を学び，日本文化における仏教と神道の影響に関心をいだくようになった。さらに日本美術に関心が深くなったピルチャーは，民芸運動を進めていた陶工，河井寛次郎と友人になり，イギリス人の陶工，バーナード・リーチとも知りあったがリーチとは遠縁にあたることが分かった。柳宗悦，浜田庄司の知遇もえたが，もっとも意気投合した相手は寿岳文章であった。すでにダ

ンテに傾倒していた寿岳に『神曲』の一節を何度も復唱したという。小さな日本庭園があるピルチャーの住居は南禅寺近くにあり，やがてその近所の僊壷庵に住む寿岳との往来がはじまり，寿岳が向日市に移転したあとも交友は続くことになる。寿岳が京都大学の石田憲次に推薦し，京大の英文科で非常勤講師としてバーナード・ショーの戯曲を教えた。逆にピルチャーが寿岳にもたらした学恩は，アーノルド・トインビーの歴史観を教示したことである[3]。

神道　ピルチャーはサマーセットシャーに居を構える貴族ポンソンビー＝フェイン家と早くから知り合いであったため，京都下総町に住み皇室，神道研究に邁進していたリチャード・アーサー・ブラバゾン・ポンソンビー＝フェイン（本尊美利茶道，ポンソンビー博士，1878-1937）の存在を知っていた。近代文明を忌避し徹底した日本生活を営み，羽織，袴という和服（大正天皇の皇后から下賜された蝶の刺繍をあしらったスカーフをしていた）で身をつつみ，茨城の納豆と菊正宗の樽酒を欠かさず，上賀茂で神道研究にふけるポンソンビー＝フェインであったが，故国のサマーセットにもどるとクリケットや狩猟に興じるカントリー・ジェントルマンでもあった[4]。

漢字　まず大阪総領事館に勤める一方，ピルチャーは日本語，とりわけ漢字の習得に熱中していた。漢字に対する興味をいたくとらえたのは，京都の住所表示であった。そこから漢字のもつ変幻自在さを知るところとなったという。漢字を習得する過程で，ピルチャーは漢字の柔軟性に気づき，あたかもルイス・キャロルのように自らの名称を変形して見せ，「屁留茶」と戯画化し，師の名前である寿岳文章を「無学文笑」と茶化した端書が残っている。その文面には「屁留茶ヨリ重掻苦蚊笑，字下苦不無書ニ　ヨロシク申上候」（1938年４月29日付寿岳文章宛書簡）と筆で書かれている。ことば遊びに興じるくらいの親密さが両者にはあった。なお，「屁留茶」ならぬ「飛龍車」としるした手紙も多く残っている。外国語を学ぶことに長けていたピルチャーは日本語習得にも積極的に取り組んだ。知り合って間もないころ，旅先から寿岳に宛てた絵葉書には，「呈上　御葉書正に拝見候。中尊寺の本尊は実に立派な彫刻と思候。御帰りに相成り候ば/是非御感想を拝聴致し度待居候　敬具　四月二十九日　ピルチア」（1938年４月29日付寿岳文章宛葉書）と記してある。寿岳と文化論のみならず，宗教論をも論じ合っていたピルチャーではあるが，筆記能力としては誤字，脱字もなく，しかも漢字をここまでつかいこなせるまでになっていた。両者の交友が深まりつつあった1937年，京都人民戦線派事件が起きていた。



ピルチャーの葉書（1939）
［向日庵資料］

向日庵での日々　京都の暑い夏の日，汗をたらしながら寿岳家を来訪したピルチャーは，まず冷水浴を楽しみ，用意された浴衣に着がえたのち，縁側で涼風にふかれ夏の夕暮れを寿岳家の人々とともにし，夕餉を囲んだという[5]。つまりピルチャーは寿岳家にとって家族同然の人であったのである。これは時局に際してひとりの知識人がいかに処したかという貴重な証言ともなろう。

戦争の不吉な暗雲がもたげてきた。敵国人として迫害をうけつつあったピルチャーを寿岳夫妻は，特高，憲兵隊から守るべく注意を払っていた―「軍部や特高の目は，私に，また私の家に，そそがれていたと思う。しかし私は，治安維持法発布以来，いわれのない当局の弾圧に反抗する気概がことあるごとに強くなっていたし，妻は妻で，当局から睨まれていた漂泊のロシア詩人エロシェンコを，少女時代家に滞在させていた経験があり，私も彼女も，当局のいう危険思想からは，いわば免疫されていた。だからピルチャーに対しても，彼が日本にいることのできたギリギリの日まで，私たちは彼を暖かく迎え，食事をともにし，冗談も言いあい，何のわけ隔てもせず，心と心とを通わせた」[6]という。1940年，大政翼賛会京都支部が発会した。

戦前のこうした時期を振り返り，終戦から２年を経たときに書かれたピルチャー書簡には，特高からも注視されていた敵国人となるピルチャーをどのように寿

岳が遇していたか，如実に語られている。「戦前の外国人排斥という最悪のなかでも，私に対するあなたの厚遇を忘れられません。日本文化と日本人の心を私が理解しようといくら努めても，日本当局はそうしたささやかな活動にも嫌疑の目を向け，気を滅入らせました。私の存在がただ迷惑をかけることでしかないというのに，あなたは訪ねてきた私をいつも歓待してくれました。あなたのご尽力に対して感謝以外の言葉を知りません」（1947年12月10日付寿岳文章宛書簡［原文，英語］）と満腔の謝意を伝えている。

青島　1939年，ピルチャーは日本の軍部が台頭していた青島へ急遽転属を命じられた。青島から発された寿岳への手紙には当地になじめず，愛する日本と離別してきたイギリス人の姿がうかがえる。寿岳に宛てた1939年７月16日付の手紙には北支青島英領事館への赴任が決定した旨が認められていた。そして1939年10月13日付の寿岳宛ての手紙には両者がどのようなことを共有していたかが窺え，興味深い。まずピルチャーは寿岳に長い無沙汰を詫び，ここ青島は余りにも無味乾燥なところなので手紙などとうてい書く気分ではなかったと弁解し，たしかに青島は快適ではあるが魂なき（‘soul-less’）場所で，中国でもなければ西欧でもない宙吊りのような土地だと切り捨てる。そこで一日濟南に小旅行を試みると，まるでヨーロッパ中世にもどったかのような錯覚をおぼえたといい，一軒の骨董屋をのぞくと宗代とおぼしき白地に茶色の釉薬がかかった茶碗を見つけ，河井寛次郎先生を思い出したと報告している。「京都のこと，つまり河井先生の工房，そしてあなたの寓居が郷愁の念にかられ瞼に浮かびました。もう一度お会いしたいものです。だが，あなたにかける迷惑，危険も心得ているつもりです。あの暗黒の日々においてさえ，あなたが向日庵でお示し下さった心温まるもてなしを忘れることはとうていできません。たとえ一瞬にせよ，あの体験がもう一度もどって欲しい」とピルチャーは切々と寿岳に訴えていた。

河井寛次郎　ピルチャーと寿岳がどのようなことを話し合っていたのか。河井寛次郎という補助線をひいてみると，会話の内容が明確になってくる。寿岳は河井寛次郎ともよく交際し親しい友人であった。また河井邸は寿岳家にも劣らないくらい外国人がよく訪れ，私設大使館とも呼ばれていた。河井は外国人を区別せず，誰ともつき合ったという。戦前，農家の下働きをしていた朝鮮人がつくった藁工品に感動し，家に招いて，その作品を雑誌に紹介したり，また，台湾人の職人を雇いその技術を生かし，京都の竹を使って家具をデザインしたりもした。参禅していたピルチャーは河井寛次郎が醸しだす禅の境地を気に入っていた。寿岳は一つの例を出して，その境地を説明しようとする―「例えば鳥が枝にやってくるという時にね，そのやってくる鳥の方に意志があってやってきたのか，あるいは，それを迎える枝の方が呼んだのか，それは実際はどっちでもいいということ。ほんとうは，鳥の方からやってきてとまる枝も，そこへ鳥を呼んだ枝も，実際は一つであって，そういう関係からほんとうの宇宙の大調和というものが成り立っている。だから，仕事をするといったところで，その仕事を持っている自分というのは，もともと別なものでなくて，一種の円環運動ですね」[7] と。さらに寿岳は漢字の「茶」という字について，「これは，ちょっと考えれば分かることですけれども，お茶の茶という字を分析すると，一番上は草冠，でも茶は草じゃない。その次に人がきますけれども，人でもない。だからといって木でもない。禅的な表現なんですが，同時に，日本の茶道が誤った方向へ進んでおるのではないか，茶というものは，本来いかがあるべきかということを語りかけている言葉でもありますね」[8] と解説している。ピルチャーがどのようなことを寿岳や河井から学ぼうとしていたのか，こうした問いかけから理解されてこよう。

『いのちの窓』　ピルチャーと寿岳はどのような交際を重ねていたのであろうか。その内実を詳しくさぐってみよう。ピルチャーは寿岳と河井の共訳で『いのちの窓』を英訳して欲しいと手紙で訴えている。これは戦後1948年，京都の西村書店から出版された本で，河井寛次郎が日常生活のなかで気づいた言葉を集めたものであった。河井は「今日はこんな言葉をもらったよ」と家族にそうした言葉を示していたという。だが，同時に「ここに記されたことばは，すべて私のことばでない。私のことばでありようがない」とまるで禅問答のように語っていたというが，『いのちの窓』はそうしたことば（「詞」）を集めた「詞集」であった。

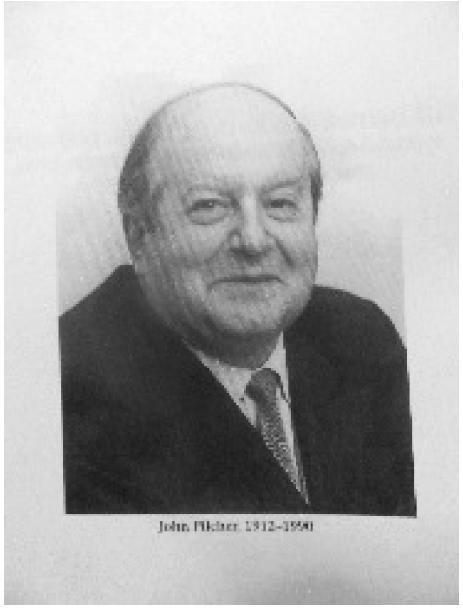
おそらくピルチャーが感銘を受けたであろう，「美の正体　ありとあらゆる物と事との中から　見付け出した喜」といった「ことば（詞）」に対して，河井寛次郎記念館館長，河井敏孝は註釈をほどこし，「人は何のために美術を求め，文化を求め，ゆかしさを求めるのか。人は喜びたい，楽しみたい，その願望に応えるものが『美』である。国宝が素晴しいのは当然であるけれども，そこに人が『美』を見つけることができなければ無意味なことだ，という反語でもある詞です。

あるとき，寛次郎を訪ねて来た記者から，生活の道具の『美』についてたずねられると，寛次郎は『この箒，これがなかったら家の中が綺麗にならないでしょう。このざる，なんとまあ素敵なかたちをしているではありませんか，丈夫でしょう。生活がいきているからこんなものが生まれてくるのです。人が必要とするから素敵なものが生まれてくるのです』」と応えた。「美しさは，ひとり美術品と称されるものの中にのみあるものではなく，生活の喜びのなかにこそあるものだというのが寛次郎の考え方です」[9] と解釈しているが，ピルチャーと寿岳，河井の間にはこのような問答がいつも交換されていたと推察できる。

開戦前の1941年，ピルチャーはマニラ経由でイギリスへ向いリスボンからブリストルに到着したが，日本語で書かれた手帳に嫌疑がかけられ，外務省から身分照会があるまで入国がかなわなかった[10]。戦後，ロンドンの外務省で勤めていたが，ピルチャーは日本に書籍を送ること禁じる占領軍の政策に対して，異議を申し立てる手紙を『タイムズ』紙に送っている。むろん，寿岳に本を送りたかったのである。

やがて1948年，イタリア語が堪能であるのを認められ，ローマ大使館に移動になる。この時期の両者が議論していた内容を伝える意義深い書簡が残っている。同年２月27日付寿岳文章宛ピルチャー書簡は，アーノルド・トインビーの歴史書から話題がはじまる。まず「『歴史研究』の第４，第５，第６巻がやがて『あなたのもとに』（‘to your 庵’）に届くでしょう」と伝え，この歴史書には数々の問題点があるものの全体としてみれば「深い学識の結実」があるとみなすピルチャーに寿岳も賛同の意を表している[11]。

外交官　戦後1951年，ピルチャーは本国外務省の日本部局長に昇進し，日本がサンフランシスコ平和条約を履行できているかを確認するのが職務となった。ピルチャーによれば，日本人と友好関係を結ぶのはそんなにたやすいことではないという。まず自ら強い意志をもち，寄りそう態度でもって接さねばならず，ただ日本語をしゃべれるだけでは事足りず，何か関心事を共有することが友好を樹立するうえでは不可欠である。さらに日本人の生活背景，日本国民が成就したことをより理解しておくのは必須条件となる。日本に赴任する外交官には幅広い教養と経験が必要とされるが，客観的な視点でもって日本を見守らなければならないとする。私の場合，日本よりもヨーロッパに精通していたため，関心はおのずと西洋文明がはぐくんだ芸術，建築，音楽などに関心を抱くようになったが，こうした文化的な素養は日本社会，文化，そして歴史に対する判断基準ともなった。若き日々からフランス語に慣れ親しみ外交官生活でイタリア，スペイン，オーストリアに駐在したため，世界でもっとも魅力あふれる日本という国を外交官として客観的に見ることができたと述懐している[12]。



ジョン・ピルチャー（1912-90）

駐日英国大使　1969年秋，東京では「ブリティッシュ・ウィーク」が開催され，東京の科学博物館ではイギリス史上の科学器具が数多く展示され，英国科学史の理解を促がそうと企画された。そしてデパートではイギリス製品の展示・販売会が開かれようとしていた。文化と商業を合わせて英国を紹介しようとする試みにピルチャーは懐疑的であった。だが後退していく経済のなかで，英国は何としてでも日本における新しい市場を見い出さねばならなかったのである[13]。

1969年10月１日，いよいよマーガレット王女を招いて東京で英国商務省と英国大使館主催による英国フェアが開催されたが，ピルチャーは駐日英国大使として，日本に関する数々の質問をくりだす週刊誌記者に応えている。「英国フェアを通じて日本人に何を訴えたいのか？」と尋ねられ，「戦前，日本人はわりあいよく英国および英国人について知っていました。戦後はそれが少しうすれました。とくに日本の青年たちは，英国より米国通です。フェアを通して，私たちは，さまざまな“橋”をかけたいのですよ」とフェアが文化交流を目的とするものであると応じている。たえずユーモアを忘れず返答している。「フェアでぜったいお買いなさいというおすすめは？」という質問に対して，

「私が銀行か何かの支配人なら美術品のオークションでいろいろ買いますでしょう。おカネがあまりなければ，布地，銀器，それにスコッチウィスキーを買います」と応えるのだが，ウィスキーはスコットランドに限ると言いつつ，「大使はどのような酒をたしなむのか？」という問いには，「梅酒がようございますね。自分で作ります」と返答し，笑いをさそう。また，「日本人をエコノミック・アニマルとごらんになりますか？」という余りにも直接的な質問に，「私はそちらの方はあまり見ません」と冗談を加え，「京都，萩，倉敷，金沢などがとくに好き」だと言葉を継ぎ，「東京ではいい庭が駐車場に変わってしまって…。ときたまいい玄関と庭があると，料亭ですね」と苦笑しつつ，日本の急変を鋭く指摘している。好きな食べ物として，「うなどん」と「アメ色に透きとおった古漬けのたくあん」をあげ，音楽は「涙の出るようなおセンチな歌はダメ」と演歌を退け，「私は現代にあわない四角な人間で…」と謙虚に自己紹介をする。最後に「お好きな京言葉をあげて下さい」という問いに対して，「おおきに。ようおいでやしておくれやした」[14] といささか大阪寄りの京都弁で締めくくっている。このインタヴュー記事からピルチャーが日本にどれくらい親しんでいたか理解できるであろう。さらにピルチャーは大阪千里山で開催された万国博覧会，昭和天皇の英国訪問においても英国大使として重要な役割を果している[15]。

推薦文　1970年，春秋社から『寿岳文章・しづ著作集』全六巻が出版されるのだが，30年以上の知己としてピルチャーは簡にして要を得た推薦文を書いた。

河井寛次郎邸のピルチャー夫妻（1977）
［向日庵資料］

I count it the greatest privilege and honour to be asked to write some words of commendation about the collected works of my old and greatly valued friends Professor and Mrs. Jugaku. I have known them for more than thirty years and therefore can claim some insight into the noble cast of their minds. Professor Jugaku played an important part in my education, since he introduced me to so many of the finer aspects of Japanese thought and aesthetics, for which I am profoundly grateful.

Professor Jugaku acts as an important bridge between Europe and Japan, in that he has interpreted marvelously the works of William Blake. He has understood the aesthetics of paper in Japan; he has mastered the intricacies of Roman letters and appreciated, for instance, the calligraphy of Professor Edmund Blunden. He shows that a high standard of craftsmanship and taste can bridge gulfs and be a sure guide in both worlds. May this edition of his works and that of his charming and talented wife make both of them even better known.[16]

推薦文には「寿岳教授は（ピルチャーが）日本を知るうえで重要な役割を果」たしてくれたことに加えて，寿岳自らが「東西の架け橋」になることに寄与したことがうたわれていた。ピルチャーが寿岳をどのように評価していたかよく理解できよう。

先に引用した1947年12月10日付寿岳宛書簡において，ピルチャーは手紙の最後に「…早急にエドマンド・ブランデンはあなたに連絡を取るはずです。あなたとの再会を喜ぶと思いますが，ブランデンはあなたの活動の数々に関心を抱いています」と新しい文化使節を紹介しようとしている。

Ⅱ　エドマンド・ブランデン

アメリカ占領軍が京都にも進駐し，1945年９月25日，連合軍第６軍司令部が設置された。その年末にピルチャーは寿岳宅を訪れている。「敗戦の年の十二月，戦後処理のため僅か数日日本へも派遣されてきた時，わざわざ属官をつれて私の家へ来て，「わが国はアメリカのように設備その他で金を惜しまず使えないが，最高に適確の文化使節エドマンド・ブランデンを送るから，君も彼と一体になって，仕事がやりやすいようにしてくれ」と頼んで帰った。これがきっかけで，ブ

ランデンと私の間に親交が始まる」[17] と寿岳は記している。

『セルボーンの博物誌』 寿岳はブランデンと親密になった機縁を文学とりわけ詩歌に加えて，自然と書物への愛である，と説く。そしてこの自然愛からブランデンの詩想が湧き出でてくる契機を桂離宮で起きた印象的なエピソードでもって語りはじめる―「『かたつむりだ！』と叫んで，万字亭の腰掛けから一匹のかたつむりをつまみ上げた氏のひとみには，ケント生れの田園詩人の純粋な歓喜が燃えていた」[18] という。寿岳は『セルボーンの博物誌』を岩波文庫のために翻訳したが，すでにブランデンの名著『イギリス文学における自然』（1927）を読んでいたので，ロマン派文学を専門とするブランデンに序文を乞うた。翻訳も含めて自著に寿岳が他者に序文を願ったのはブランデンのみであった[19]。

「今また私は，ホワイト畢生のこの名著の，寿岳文章教授の手になった翻訳のよろこび迎えられるのを，重ねてうれしいことに思う。これは，訳者の持つセルボーン風の親和感や読書域からみて，訳者にとってはこの上もなく打ってつけの企てである。私は彼がホワイトに新しい読者圏を与えてくれたことを，心からの喜びとする。なぜなら，ホワイトの示す態度の重要さは，ただ，文学の世界だけにとどまるものではない」[20] と語り，古典が最適の訳者をえて古典としてよみがえる瞬間をとらえている。そして，最後に，この名著が今日の環境問題まで訴えているのか，ブランデンによって説かれているが，この結句は，人類の未来に対するひとつの託宣とも解釈できよう。

書物愛　さらに「ブランデン氏と私とをつなぐ友情のきずなのひとつは書物に寄せる共通の愛である」[21] と寿岳は語ってやまない。ブランデン，寿岳ともに愛書家としては人後におちなかったが，同じ書物好きでも方向がかなり違っていた。ブランデンは詩や小説を執筆するために資する文献として書物を集めた。これが本を蒐集する最大の理由であり，1965年にはほぼ１万冊の蔵書を築いていたという。内訳としてチョーサー39冊，シェイクスピア200冊，ミルトン50冊，ドアイデン40冊，ポープ70冊，スウィフト75冊，アディソンとスティール50冊，サミュエル・ジョンソン90冊，そして愛好するロマン派作家の作品は，コールリッジ150冊，シェリー100冊，キーツ80冊，ラム70冊，ワーズワス70冊，クレア25冊などを数えた。ただ，ブランデンには購入するのに奇妙な基準があった。つまり購入予算を自らに課し自らを律していたのである。1920年代には６ペンス，1930年代には２シリング６ペンス，1950年代には10シリングを上限と決めて，それ以上の価格では決して求めようとはしなかった[22]。

また価値があるのに看過されている版を「救出する」のも，ブランデンにとっては蒐集の重要なポイントになった。たとえば，異本としてチャールズ・チャーチル８版，サミュエル・ロジャーズ17版，クリストファー・スマート28版，ウィリアム・コリンズ25版，エドワード・ヤング20版などマイナーな詩人の詩作品を数多く架蔵していた。また，詩人の親族，友人にまつわる文献も集めていて，たとえばコールリッジ関係文献としてコールリッジ関係者の本を45冊も加えていた。さらに筆記を見る眼力もたしかで書入れがある本を珍重した。ラムのミルトン詩集，バイロンが自らの詩篇を書き入れた，バイロン自身が所有していた『ロリアド』を入手したりした。『エドマンド・ブランデン書誌』に序文を寄せたルパート・ハート＝ディヴィスは，どの本のいずれの版をも，また作家の筆跡をも知悉していたブランデンを称して「神の本能をそなえた」最高の「ブック・ハンター」であると称賛した[23]。

『東への道』 ブランデンは蒐集を第一義にした愛書家であったが，寿岳は造本という書物の工芸的側面に惹かれていた。だからブランデン選詩集『東への道』（*Eastward*）を製作するのに全力を尽くした[24]。ブランデンの筆跡の美しさを際立たせようとして便利堂でコロタイプ印刷をした。ただそのままコロタイプに移すのではなく，研究社印刷所で組んだ活字ものの清刷りを前に用意して縮写するという念の入れようである。また日本特有の染紙の良さを活かすため陸中十沢町在住の国画会会員，及川全三に楮（こうぞ）を主原料にした和紙を漉いてもらい，本染にした。注意は細部にも及び，署名の筆をなめらかにするため，雲母ひきをほどこし，見返しは別注の特漉にして，雁皮の表紙から楮の本文へ移行するのに不自然さを感じさせない工夫をこらしたという[25]。かつてブランデンから教えを受けた，今では教授になっている，十年前の学生たち―西崎一郎，曽根保［お茶の水大］，尾島庄太郎［早大］，酒井義孝［一高］―は，最近二年間のブランデンの創作なる詩27篇，フランス語，ラテン語の訳詩７篇を所収した詩集『東への道』を恩師ブランデンに贈呈した。250部限定で出版されたが，「これまで多くの本を出したが，こんな感激をもって自分の手にするのは初めてだ」[26] と詩人は目をうるませたという。

校歌　当時，関西学院の教授であった寿岳は，校是で

寿岳とブランデン（1949）

ある ‘Mastery for Service’ という理想が詠みこまれていない従来の校歌にあきたらない想いをしていたので，校歌の作詞をブランデンに依頼した。1950年４月５日，帰国の途についた詩人ブランデンを追慕して関学での活動について想いを，寿岳はめぐらせている。創立六十周年祝典の直前，関学を訪れたブランデンは自作校歌の発表に臨んだ。そのブランデンの姿に感動した寿岳は「学院における長い生活中，あの時ほど深い感激に浸った経験は稀である」と吐露し，「中央講堂に溢れる学生諸君も文字通り水を打ったように静まり返り，詩人が語る学院への希望と祝賀の言葉に耳を傾けた」と会場の様子を伝え，グリークラブが新しい校歌を披露すると，「歓喜のどよめき」が講堂を支配したという。その後，詩人の署名を求める学生たちに何時間もかけて対応する詩人に「高貴な伝道者」の姿を認めることになる。朝日新聞の記事はブランデンが校歌を軽く書き流したかのように伝えたが，寿岳はその報道を否定して，「実は数ヶ月の苦心の後に成った」もので，「その間，依頼した私との間に幾度手紙で打ち合わせもあった」と断言した。ブランデンの校歌は学院史のうえだけではなく，「日本文化全体から見て大きな意義をもつ」[27] と寿岳はブランデンの作詩をたたえた。

実はほぼ半年以上前から寿岳は新しい校歌の構想にたずさわっていたのである。だから「私の乞いを容れて学院の学歌を歌ってくれたこと，その校歌に感激して，同窓の先輩山田耕筰氏が，神埼院長からの委嘱状を受けるが早いか，霊感の漂うにまかせ，直ちに立派な歌曲を母校に寄せた」[28] という校歌が成立する経緯を余すところなく寿岳は語っている。

一篇の詩　ブランデンと寿岳の親密な交友を物語る一篇の詩が残されている。1949年10月28日，三宮にあった民芸調の食事処，竹葉亭の客になった二人だが，ブランデンは寿岳に対して即興の詩を献じた。両者の友情が詠われた詩である。寿岳は手控え帖（向日庵資料）に自らこの詩を写しとっていた。

My friend, a famous man of learning,
In all things liberal and discerning,
Has brought me—to my great delight
To the “handsome house” again tonight;
Long may it prosper, and may I
Be a guest of yours again before I die.[29]

むろん第１行目の「わが友」とは寿岳を指し，リベラルで眼識あふれる人だと歌われ，第４行目の「すばらしい店」とは竹葉亭をさすのであろう。これはメニューの裏側に書かれた即興詩らしいが，第１行目と第２行目［ŋ］が，第３行目と第４行目［t］が，そして第５行目と第６行目，二重母音［ai］が韻律にのっとり各々押韻されていき，軽やかなリズムを奏でている。友情を確認しあった二人がこれ以上ない晩餐をともにする歓びに浸っている様子が生きいきと伝わってくる。

「ヒロシマ」　寿岳がダンテ『神曲』を翻訳していた1975年，ブランデンが1949年に作詞した詩（Hiroshima）に，文章の訳詩を並置し，詩人の横顔のレリーフ像を配して刻んだブランデン詩碑（デザイン，高木高志，制作，円鍔勝三）が広島市立図書館の前庭に設置され，８月３日，除幕式が挙行された。1948年，ブランデンは広島を訪れ，浜井信三市長の案内で広島の惨状をまのあたりに見，原爆の悲惨さを知るとともに広島市民に同情を禁じえなかった。その翌年に「ヒロシマ」は市長のもとへ贈られた。

ヒロシマ　よりも　誇らしき
名をもつまちは　世にあらず
君は平和の　鳩のやど
をちこちびとは　ここに来て
よみがへりたる　人類の
かがやく　姿　みるらむか
Hiroshima! no finer pride
Did ever earthly city guide
Than yours, —to be the happy nest
Where the glad dove of peace may rest,
Where all may come from all the earth
To glory in mankind’s rebirth!

これは「ヒロシマ」の第３スタンザであるが，ブラン

デンの原詩と，寿岳の訳詩とが相乗効果をえて，ひとつのハーモニーを奏で，死の灰からフェニックスが甦ってくるかのごとく，広島が再生し顕現してくる瞬間を祈っているかのようである。

Ⅲ　D. J. エンライト

ブランデンを介在させて，エンライトと寿岳との間に交渉の文通が始まり[30]，受入れの条件を甲南大学側が考慮し，1953年８月９日早朝，エンライトは羽田空港に降り立った。寿岳は写真によってエンライトと家族を知っていたが，エンライトは迎えに出ていた寿岳の相貌を少しも知らない。「まことに不思議な，しかし強く印象の残る出会い」であったようだ。その夜は帝国ホテルに宿泊し，翌朝，特急「燕」号で西下したが，二人は「車中，しゃべり通しにしゃべり，ブランデンさんの推輓に寸分の違いのないこと」[31]を知り，初対面にもかかわらず寿岳はエンライトの人間性に魅せられた。1950年代初頭，エンライト一家は，甲南大学のある岡本における唯一の外国人であった。

ケンブリッジ大学ダウニングカレッジをF. R.リーヴィスの指導のもと卒業した。そのためケンブリッジ大学を牙城とする文学機関誌『スクルーティニー』の有力な編集者であった。エンライトの招聘に関しては，武田長兵衛と岩井雄二郎の尽力があった。ケンブリッジ大学を母校とするのが三者を結ぶ共通点である。甲南大学へ着任したとき，すでにエンライトはバーミンガム大学教授であり，教育歴としてはエジプトのアレキサンドリア大学で教鞭をとった経験もあった。

「胴体と衝撃力のない日本文学」　まず着任するとエンライトは精力的にジャーナリズム活動を開始した。エンライトが発表した論評，批評すべてを寿岳が翻訳している。つまり，両者は一体となって批評活動を展開していったのである。まずイギリスと日本の現代文学の現状を比較するところから着手した。明治以来の詩歌を概観したのち，白秋の「片恋の薄着のねるのわがうれい」という詩行に注目して，「超現実主義を予想する一行を含んでいる」と指摘する。そして日本は今，「戦争の惨害と戦後のひどい混乱」を体験し，「絶望，恐怖と，壊滅感」をどの国よりも味わったという。「鼠の路次，倒れる塔，こわれた墓石の風景」とともに「原子爆弾」が現実となり，「日本の現代詩のきわだった特徴」を示すまでになったと指摘する。急激なこうした大転換が日本の詩歌に何をうたわねばならないかを突きつけたが，日本の詩人たちはまだいかに歌

D. J. エンライト（1956）

うべきか用意ができていないようだ，とエンライトは日本文学の現状を批評した[32]。エンライトの批評は，このように1950年代の日本の文学界に波動を起していく。

エンライトは俳句を愛好していて，「落花枝に帰ると見れば胡蝶かな」という句を評価する。この守武の句はパウンドやイマジストの詩人たちに大いに訴えかけたことでよく知られているが，「新鮮で，生き生きとしている」とみるところは同じだが，エンライトは，「完全な一つの詩と見るよりは，一つの詩の部分だと」しかみない。つまり詩が対象とする人間性をこの短い詩型では盛り込めないのではないか，というのがエンライトの見解なのである。

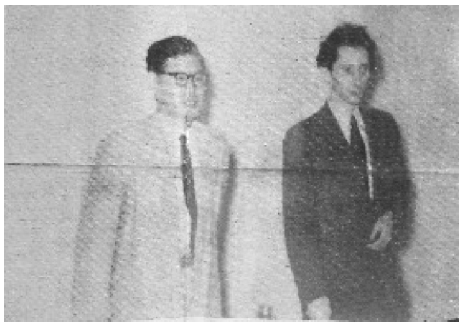
日本文学の英訳　エンライトによれば，英国においては日本の詩は英訳された日本文学史のなかでしか知られていない程度であったという。そうした現状でアーサー・ウェリーの英訳された『源氏物語』は，スコット・モンクリーフが訳したプルーストの『失われた時を求めて』と並んで翻訳によるみごとな文学的再創造であると感嘆している。さらにエズラ・パウンドによる能の英訳が公にされてから，この文学形式はイギリス国民の注意するところとなってはいるが，深い興味をひきおこすまでにはまだ到っていない。「文学的な価値では，これら日本文学の翻訳は，『カセイ』という題でパウンドが訳した李白その他の中国詩人からの翻訳と比較すれば，文学価値ははるかに劣るのではないかとエンライトは指摘する。

そして，アーサー・ウェリーの能の翻訳もそれほど

の評価を得れず，芥川龍之介の『河童』『地獄変』などの短篇，近藤いね子が英訳した漱石の『こころ』，グレン・ショーが訳した菊池寛の『藤十郎の恋』，R. H. ブライスの『日本の風刺詩川柳』などが紹介されている現状を報告する。残念ながら「日本の詩歌はいつでも胴と衝撃力とを欠いている」とエンライトは非難するが，ただ1940年に日本学術振興会が刊行した英訳万葉集は傑作であると評価している。そしてイギリスへ現代小説家の英訳された日本小説を早急に紹介してほしいとイギリス文学界の現状を告げる。逆に「イギリスが知らねばならぬのは今日の日本であって，サムライや芸者や公家が出没するあのロマンティックな『古い日本』ではない」[33] と助言して批評を閉じる。代表的な文芸誌『文学界』に発表された批評だけあってかなり注目されたのであった。

カブキ　エンライトは日本文学の現状ばかりだけではなく，伝統的な歌舞伎という古典芸能に対しても一家言をもっていた。まず外国人を歌舞伎が脅かす要素は，「感情のあふれときびしい形式とが奇妙に，交じりあっている点」であるという。そして『妹背山』を例にとるのだが，「セリフや所作」が意味するところを外国人が理解できないにせよ，人間の情感が共通しているためか，「あの深遠で奥妙な芸術を異国人に思い出させる箇所」というよりも，「マーロウやシェイクスピアが初演された時代の，極めて民衆的であったエリザベス朝の芝居小屋が思い出される」という興味深い指摘をエンライトはしている。加えて観客側も「十六世紀の英国劇場で見うけられたものと似通」っているにちがいないという。エンライトは日本語を理解できなかったが，舞台上の演技には感銘を受けた―「『竜虎』の虎の踊りと『妹背山』で母と娘が体をゆっくり屈め，頭や肩をすばやく小刻みに動かして悲しみを伝えるしぐさ，『勧進帳』で弁慶になった猿之助の感嘆する演技，エリザベス朝の舞台を思わせる花道から，弁慶が隠れていく場面はどの国のどの舞台で見た芝居以上に印象深く，劇の精髄を盛り，力にみちみちたもの」であったと感激を隠そうとはしていない[34]。

奇妙な文学受容　来日して早々にエンライトが日本の文学界へ与えた直言は辛辣であったが，かなり的を射ているものであった。エンライトによれば現在の日本では，フランスのサルトルとカミュ，ドイツのリルケとカフカ，イギリスのT. S. エリオットとグレアム・グリーンが一団となって，紹介されている。たしかにこれらの作家は若者が自己形成するとき何らかの寄与をなすであろうが，日本の現状のように，これらの作家たちが識別されずに，影響を同時に発散しているかのような図は異様でしかない。本質的にまったく異質なこれらの作家たちにいかなる共通点があるというのか。日本の読者には，共通して暗さ，皮肉，否定精神，平常な人間性への深い嫌悪が一つの様相として映っているようだ，とエンライトは日本の文学界を難じている。



寿岳とエンライト（1955）

さらにエンライトは続ける。日本にとって深い病巣は，ただの印象としてしかこの様相が映らないことである。T. S. エリオットの『荒地』に人生の絶望を見て，日本人は感銘を覚えたがエリオットのキリスト教精神については誰も云々しない。リルケの嘆きは自己の孤立を意識している日本の若い詩人たちを魅了したが，リルケの個性的な甘美さは理解しようとしない。カミュ，サルトルにいたってはもっと悲惨な受容がなされている。実存主義というレッテルで一括してくくられてしまい，「絶望の哲学」ばかりが吹聴される。カミュとサルトルはまったく異なる作家で，カミュはみじめにうごめく作中人物に寛容さを示す快活で明朗な作家であり，他方サルトルはまさにそこが対蹠的なところである，とエンライトは指弾する[35]。

そしてエンライトは模倣からは何も生まれないと断言する。作家は自身のなかに誠実な悲しみをもっているならば，自らの独自の方法でそれを処理するしかない。ヨーロッパの作家たちが示す「文学的な悲哀のなかに逃避してはならない」。日本の若い詩人たちは自国の文学が助力を与えてくれず，「西洋に指導を求める」のは理解できるが，「もっと批判的であって」欲しいと，エンライトは結論づける[36]。

詩の危機　日本の近代史の動きは比類がないほど烈しいもので，ヨーロッパが400年かけてやりとげたことを，わずか80年で完了したため，生活は詩歌を負い越してしまった，と日本が直面せざるをえなかった激変をまず指摘する。人々は高度に工業化している社会に生きているというのに，どうして詩人だけが「月，松，

富士，梅の花，秋の木の葉など」に自らを閉じ込めなくてはいけないのか。あえてこの伝統を維持していくなら，詩は「なまぬるい，つまらぬ客間のゲーム」に堕落してしまう。そしてエンライトは外国文学の移入について，日本の病巣を明確に締結する―外国文学から憂鬱，厭世思想，人生への憎悪などおよそ否定的な情緒ばかりを偏愛する。反面，外国文学のもつ健康で積極的な姿は無視されるか誤解されてしまう。たしかに詩の受容は難しい。T. S. エリオットを読むにはアンドリュー・マーヴェルを，そしてイェイツを，リルケにはゲーテを，サルトルにヴァレリーの「海辺の墓」を重ねて読まなくては真意が理解できないのだから。私は日本の若い詩人たちに「イェイツ，ブレイク，ベン・ジョンソン，またシェイクスピアなどの，ほかの詩人にも注意を向けて欲しい」と願っている，とエンライトは訴えている[37]。

「新しいヒューマニズム」　日本の詩人がじつに立派な英語で書いた詩を読み，エンライトはさらに深い絶望におちいった。塔，寺院，空などテーマは上品なものばかりで，しかも全く一本槍であった。「一体これは，現実の日本と何のかかわりがあるのだろうか」とエンライトは疑問に思わざるをえない。現実のきびしい生活と戦っている人々に対して，月や寺の美しさだけを哲学的に書くのは，「これらの人々への侮辱」ではないのか，とまで憤りを覚えた。生活の一部でしかない題材を延々と詠うことは，すなわち「詩が醜い現実をとりあげないならば，醜い現実はいよいよ醜くなり，いよいよ現実になるだろう」と警告する。これでは詩が亡びてしまうのもむべなるかな，である。人間に対して公正な批判を下しながら，力強く借りものではない現実的な詩を書くことでしか詩には生きる道はない。今の世代の日本詩人たちは解答を近いうちに必ずや見い出すに違いないが，「人生のためにも見つけ出さなくては何もならない」[38] と苦言を呈している。文学の本道は何であるかをエンライトは厳しく問いかけているのだ。

「日本での十二ヶ月」　日本の詩歌が，歌舞伎の力強さや浮世絵，版画の精彩ある表現と比べて貧弱に見えるのは，何も日本人が詩歌の創造力に欠けているからではなく，どうも因襲の抑圧的効果のためではなかろうかとエンライトは考える。ヨーロッパのどの国の詩歌の歴史と比べても，どうやら日本の詩歌は停滞しているようで，更新と健康に必要である潮の干満，作用と反作用を欠いているようだ。日本語が詩歌に用いられた場合，五音綴と七音綴の行の交替にぬきさしならぬ必然性があるとは，どうしても私には思えない。生きた言語はいつも柔軟である。だから私はこうした伝統を打破しようとする近代の日本詩人の努力を賞讃したい，とエンライトは評価している。

出会った人々　知的な面では京都が後向きなのに対して，東京は前向きであるとの印象をもつエンライトには，様々な出会いがあった。私は「進歩」に対していささかも感傷的な熱情を抱くものではないが，どんな国でも，その過去に依存しては生きていけない。幾度か日本の首府を訪れているうちに，私は幸運にもイギリス人の陶工，バーナード・リーチにめぐりあえた。また自分の国へ帰って翻訳を出版するために，現代日本の作家たちから材料を集めている有力なアメリカの出版者や，日本文学を研究している著名なアメリカの教師や，私より立派な英語をしゃべることのできる文筆家，吉田健一，すでに名声をかち得た日本の劇作家，「荒地」派と呼ばれる（このような呼称がつけられたのは不幸だと思う）実験的な年刊詩集への幾人かの寄稿者，数名の日本の小説家，近代日本の作品を英語なりフランス語なりに翻訳している日本及び外国の学者たち，近代ヨーロッパ文学の研究と教授に従事している多くの日本の学者たちともエンライトは会うことができた。

エンライトによれば，文化活動に従事する人々の仕事によしや弱点があろうとも，また仕事の結果が，初めのうちは，たとえば河井寛次郎のような陶工の仕事ぶりが示す，あの確かさを欠こうとも，力を尽した活動と努力から日本および世界にとって，価値のある何かが生まれてくると信じたい。東京を非常に刺激的だと感じるのはそのためなのだ，とエンライトは説く。なるほど東京には京都の魅力はない。しかし東京は，何といっても未来の知的な中心地であるのだ。外国人にとっては，新しい芸術の方が鑑賞しやすいという事実もまた認められねばならない。言葉を知らないので，私たち外国人には近代の日本演劇を理解しにくいが歌舞伎は非常に面白い。それは動作が生きいきと様式化されていて舞踊が表情に富み，衣装がすばらしいからである。言葉の意味はほとんど分からぬにしても，文楽で浄瑠璃を語る太夫の声からかなり芸術的享受を得ることさえ，私たちは可能なのである。以上のような総括を残しエンライトは短い日本滞在を終えた。寿岳はエンライト自身には「猿来都」という名前を与え，夫人には「燕来都」という美しい名前を授けている。

「広島の記念碑」　詩人としてエンライトも広島を題材にして詩を書いている。先に紹介したブランデンの

「ヒロシマ」と比較すると，その訴えるところはまったく異なっている。いわば，古きよきロマン派詩と，現状をつつみかくさず把握して歌う現代詩との間にはこれほどまでの隔たりが生じているのかとまさに実感させられる。エンライトの原詩と寿岳の訳詩を合わせて紹介しておきたい。

The Monuments of Hiroshima
The roughly estimated ones, who do not sort well
with our common phrases,
Who are by no means eating roots of dandelion,
or pushing up the daisies.
The more or less anonymous, to whom no human
idiom can apply,
Who neither passed away, or on,
nor went before, nor vanished on a sigh.
Little of peace for them to rest in, less of them
to rest in peace:
Dust to dust a swift transition, ashes to ash
with awful ease.
Their only monument will be of others' casting—
A Tower of Peace, a Hall of Peace, a Bridge of Peace
—who might have wished for something lasting,
Like a wooden box.

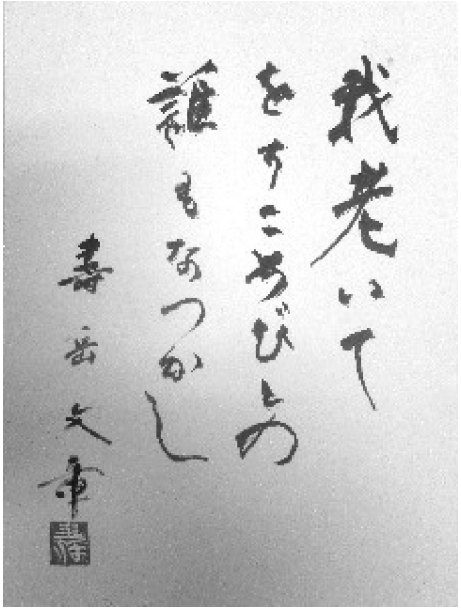
（ヒロシマの記念物
この十把一からげに推定された人数，
あり来りの文句ではどうにもならぬ彼ら，
決して蒲公英（たんぽぽ）の根を食べたり，雛菊を
押しあげたりはしない彼ら。
このともかくも名の無いともがら，世の常の
言い方はあてはまらぬ彼ら，
身まかったのでも，あの世に赴いたの
でも，先立ったのでも，静かに息絶えたのでもない彼ら。
彼らをいこわせる平和は乏しく，平和にいこう彼らはなお乏しい。
塵は塵に瞬時の推移，むくろは灰に何と言うあっけなさ。
彼らの記念は他人の作るものばかり—
平和の塔，平和会館，平和の橋
—彼らは何かもっと永続きするものを欲していたのかもしれないのに，
たとえば木製の棺のような。）[40]

エンライトは広島の犠牲者に捧げる形ばかりの平和記念物に対して辛辣な諷刺を投げかけているが，土にもどっていく木棺を最後の一行で表出して，大きな落差が生じさせ，一気にアイロニーを完結させている。詩のもつ言葉の威力を全開させた佳篇である。

寿岳の態度　ここで当時，寿岳が考えていた信仰をめぐる世界観について検討しておきたい。寿岳は仏教徒であり，真言宗の現状を憂いていた。まず，「私は英文学という外国文学を専攻したことを悔いない。この学問のおかげで，私は絶えず世界の声を聞く。交友もひろく世界に求めることができた。それもただ行きずりの友としてではない。いま世界のそれぞれの分野で最も尊敬されているような人々と爾汝（じじょ）の交を訂し得る因縁の一半は，私の場合，少なくとも私の学問が媒介となっているのである」と自己の立場を鮮明にしている。そして，世界人としてのあり方を強く主張する—「今の問題としては，ひとり真言宗と言わず世界のあらゆる正しい宗教を通じて最も大切なのは，それが最大公約数的に結集して，ルネサンス以後の近代世界に君臨する唯物論的な世界観への防波堤となることであろう。この事の重要さは，どんなに言葉を重ねても重ねすぎることはない」と訴え，「宗門の窓は，常に全世界に向って開かれておらねばならず，そのアンテナは，常に世界の思潮の動向を誤りなく捕らえるものであらねばならない」[41] と狭い世界に閉塞するような宗教的な態度を改めなくてはならないとした。このような世界観をもつ寿岳とエンライトの間には実り多い議論が交されていた。

Ⅳ　結びにかえて

最晩年，書を求められた寿岳は「我老いてをちこちびとの誰もなつかし」と詠ったが，こうした異国の友人たちも胸を去来していたのであろう。ただ不思議なことに寿岳には渡航の経験が一度もなかった。畢生の翻訳ダンテ『神曲』が読売文学賞に浴した晩年，寿岳はピルチャーから英国への来訪を乞われた。英国航空が大阪空港に就航するのを記念しての招待で「国賓なみ」に遇するという。すでに足が悪かった寿岳のために車椅子のまま飛行機に乗れる便宜もはかるとする好意あふれた申し出である。そして，寿岳がこれまで研究，翻訳してきた詩人ブレイクが滞在したサセックス海岸，ギルバート・ホワイトの博物誌の舞台になっているセルボーンなどをめぐり，「好きな日程通りに滞在してくれてもよい」という「至れり尽くせりの条件」でピルチャーは招待を申し出てくれたのである。



寿岳文章　書（1980）

だが，「百聞は一見にしかずで，自分の学問や研究と深い関係のある土地へ行くにこしたことはなかろう」と譲歩しつつも，寿岳はピルチャーからの親切な申し出に応じなかった。着手している仕事と妻の病苦を理由にあげているが，それはあくまでも表向きであって，真意は別のところにあったと推察される。

英文学研究の大家となった寿岳が一度も渡英した経験がないことに誰もが驚きいぶかった。経験したことがないのにもかかわらず，その場にいるような臨場感を寿岳の書くものから多くの読者はかぎとっていたのだ。寿岳はとりわけ G. ホワイト，W. H. ハドソン，R. ジェフリーズなどのイギリス自然文学を愛好していたが，戦時中には H. ウィリアムソンの『かわうそタルカ』（1927）を翻訳している。むろん自然文学は自然が中心になるのだが，寿岳はまず座右に１マイルごとに縮尽した詳密な英国地図をおき略図を描き，「臨場感に浸る習慣」が身についていたため，「書くものにおのずとにじみでる」のではないか，と自身は説明している[42]。

寿岳が渡航しない本心はもっと別のところにあった。自宅の向日庵を中心にして展開してきた異文化交流において，ある程度の達成感を感じていたのは確かであろう。それ以上に寿岳には自己のゆるぎない態度があった。つまり確立した自己ゆえ，外国へ行く必要性をそれほどまでに感じていなかったのである。

1969年６月に開催された日本英文学会第41回大会シンポジアム「日本に於ける英語教育と英文学研究」における寿岳の発言には渡航を拒否した真意をより明確にうかがうことができる。今日でも英語教育における研究と教育の背離が問題となっているが，それはすでに半世紀以上もまえから何度も論じられてきた課題でもあったのだ。

このシンポジアムは由良君美が司会をつとめ，寿岳以外には土方辰三，磯田光一が出席している。寿岳には「グローバル・ランゲージ」である英語をわれわれ日本人がいかに習得し，どのように活用していくか，といった問題がまず前提にあった。寿岳も含む明治世代は，「われは日本人であるという自覚の上に立って日本文化を表現してきた」と主張し，先例として，新渡戸稲造，岡倉天心，内村鑑三，鈴木大拙など「英語で日本の心を表現した人」をあげ，イギリス人から見ると「とても変な英語」で書かれた天心の『茶の本』が今日でも世界で愛読され，日本を知る最良のすぐれた手引書になっている実例は無視できない，と指摘する。そして寿岳は「自分は日本人であるという自覚に立って，それぞれの日本人が，日本のこころ，日本の生活，それをもっともっと英語で表現することに力を入れてほしい」と提言した。英語教師こそ，自ら率先して実践すべきである，と主張してやまない。よって「自分をしっかりと自分自身の立場においてはっきりとものの言える」ような「多元化現象」は望ましい，と寿岳は考えている。そして結論として，「日本語が読めない外国人が多いがゆえに，英語を媒介として，われわれのほうからまず積極的に堂々と実践してゆく」という態度を，「英語教育の一つの指標」にするべきではないか，と寿岳は発表を締めくくっている[43]。以上のような立場に立って寿岳は有言実行で数多くの英文著述をものしてきて国際的な評価を得ているが，いずれも自己本位がつらぬかれ書かれた著作であった。むろんこの場合，「自己本位」とはひとりよがりを意味しているのではなく，自己を中心におき，対象をつきつめて考え，表現するという意味である。

注

1）Hugh Cortazzi, ed., *The Growing Power of Japan, 1967-1972: Analysis and Assessments from John Pilcher and the British Embassy, Tokyo*（Renaissance Books, 2015）, p. 367.

2）*Ibid.*, p. 328.

3）*Ibid.*, p. 369.

4）*Ibid.*, p. 370.「［ポンソンビー］先生は日本国中を旅行された。それは一つは日本の歴史，殊に神道やそれにまつわる民間信仰などを研究されるためでもあったらしい。また，陵墓や道祖神などもよく調べて廻られた。それもまた，日本の上代史を明らかにするために

は，考古学的に陵墓の研究を行い，民俗学的に民間信仰等を究明しなければならぬという」川瀬一馬『柚の木』（中公文庫，1989），p. 170.

5）*Ibid.*, pp. 369-70.「あれ［ジョン・ピルチャー］はここを，自分の家のように思っていたからね」とは，寿岳の直話である。寿岳文章・章子『父と娘の歳月』（人文書院，1986），p. 198.

6）寿岳文章「私の戦中戦後史抄」『英語青年』（129巻9号），「敗戦の年の冬，イギリス外務省の要職を帯びて日本へ来た現駐日大使サー・ジョン・ピルチャーは，東京での仕事をすますなり，わざわざ私たちを訪ねに西下したが，この海波の親友のためにとりのみであった『紙漉村旅日記』の一本を手にし，作業のあらましを聞き，深い感動に打たれたらしく，『戦争で何もかもが狂っていた最中，君たち夫婦は，こういう狂いのない文化継承の立派な仕事に従ってくれていたのか』と，堅く私たちの手を握った」『紙漉村旅日記他 寿岳文章・しづ著作集』第5巻（青秋社，1970）p. 417.

7）寿岳文章「私と河井寛次郎」『テレビ対談　美術家への証言　NHK日曜美術館　3』（学習研究社，1979），pp. 21-22.「人々は祈らなくても祈られながら生かされているのだ。頼まなくても聞き届けられているのだ。乞う前にすでに与えられているのだ。だからこそお礼が言いたくなる。祈らないではいられなくなる」河井寛次郎『六十年前の今』（東峰書房，昭和43年），p. 191.

8）*Ibid.*, p. 22.

9）河井敏孝「河井寛次郎著　詞編『いのちの窓』に依り寛次郎の思い，願いに迫る」『向日庵』第2号（NPO向日庵，2019），pp. 56-58.「美を追いかける美一美術というものはこれ以外ではない。美は追いかけるから逃げ出す。逃げ出す美を人はどれ程掴み得たか」『いのちの窓』（東峰書房，昭和50年），p. 50.

10）Hugh Cortazzi, ed., *op. cit*, p. 371.

11）寿岳文章「私の戦中戦後史抄」『英語青年』（129巻12号）.

12）Hugh Cortazzi, ed., *op. cit*, p. 377.

13）*Ibid.*, pp. 374-76.

14）「サー・J・A・ピルチャー駐日英大使へ20の質問」『サンデー毎日』（1969年9月28日号），p. 31.

15）Hugh Cortazzi, ed., *op. cit*, p. 374-76.

16）ピルチャーによるタイプ原稿（1969年10月24日）［向日庵資料］より転記する.

17）寿岳文章「エドマンド・ブランデン詩選集『東方へ』」p. 284.

18）寿岳文章「心の温い詩人―ブランデン氏との二年間」『朝日新聞』（昭和25年3月26日）

19）寿岳文章「エドマンド・ブランデン詩選集『東方へ』」p. 284.

20）エドマンド・ブランデン「序文」ギルバート・ホワイト，寿岳文章訳『セルボーンの博物誌』上巻（岩波文庫，1949），p. 3.

21）寿岳文章「ブランデン詩集―装本覚えがき」『寿岳文章書物論集成』（沖積社，1989），p. 913.

22）Barry Webb, *Edmund Blunden : A Biography*（Yale University Press, 1990）, p. 248.

23）*Ibid.*, p. 247. Rupert Hart-Daris, “Personal Introduction,” to B. J. Kirkpatrich, *A Bibliography of Edmund Blunden*（Oxford University Press, 1979）, p. viii.

24）寿岳文章「ブランデン詩集―装本覚えがき」『寿岳文章書物論集成』（沖積社，1989），p. 913.

25）*Ibid.*, pp. 913-14.

26）「ブランデン氏へ豪華詩集―『東への道』愛弟子らが製本」（『朝日新聞』1950年3月12日）

27）寿岳文章「関学とブランデン氏」（『関西学院新聞』昭和25年4月15日），「詩魂をこめた校歌」『朝日新聞』（1949年6月4日）. “A Song for Kwansei,” *A Bibliography of Edmund Blunden* p. 85.

28）寿岳文章「美しい友情で新校歌なる」（『関西学院新聞』1949年6月15日）

29）B. J. Kirkpatrich, *A Bibliography of Edmund Blunden*（Oxford University Press, 1979）には記載されていない。

30）寿岳文章「若き一英詩人のために」『英語青年』（1954年6月号），p. 33.

31）“It happened last week that one of the best of our younger poets, one whose work has been well represented in this Supplement, called on me; and I briefly described to him the kind of post in Japan which you had written about, and Japanese life and culture in action, and counselled him to think it over. Naturally I did not make the opportunity too definite.

“So, this morning I have a letter from him which I am enclosing; and in acknowledging it I have urged him to approach you directly in his own letter. If he does so, even though the Konan situation may have changed, it may keep you in mind of a young English writer who would in my opinion be an excellent choice in a Japanese university. He is experienced in the profession as well as active in his reading of literature and the esthetic side of things. In appearance he is distinguished and he is exceedingly sincere in what, with expressive power, he says. The rest he will be telling you, as you require....” 寿岳文章「若き一英詩人のために」『英語青年』（1954年6月号），p. 33. “D. J. Enright, who wrote most of the German criticism, began to contribute to *Scrutiny* as an undrgraduate. Even in these youthful contributions, Enright’s disconcerning ability to jolt us out of soutine appears again and again. Wittily and sometimes even flippanthy, he defended a kind of othodoxy and centrality of taste and judgsnent. Few English critics have written with such justice and delicacy about German writers as Enright, and above all, of Goethe and Thomas Mann,” William Walsh, *F. R. Leauis*（Indiana University Press, 1980）, p. 88.

32）D. J. エンライト，寿岳文章訳「胴と衝撃力のない日本文学――外人の観察―」『文学界』（文芸春秋社，1955），p. 140. 吉田健一とエンライトは友人であった

ため，吉田と関係が深かった文芸誌『文学界』への寄稿が可能になったのであろう。

33）*Ibid.*, p. 142.

34）D. J. エンライト，寿岳文章訳「カブキ拝見」『朝日新聞』（1954年６月５日）

35）D. J. エンライト，寿岳文章訳「多すぎる荒地―日本文学界への警告」『朝日新聞』（1954年１月14日）

36）D. J. エンライト，寿岳文章訳「伝統と革新の詩精神―俳句を追越した近代」『大阪新聞』（1954年２月６日）

37）D. J. エンライト，寿岳文章訳「西欧文学は日本に理解されているか」『図書新聞』（図書新聞社，1954年７月31日）

38）D. J. エンライト，寿岳文章訳「日本での十二ヶ月」『甲南大学新聞』（1954年９月11日）

39）*Ibid*,. 1970年代末，エンライトの想い出を尋ねたラッセル・グリーンウッドに対して，寿岳は好印象を語っている。“When I visited Professor Jugaku, Then housebound, in the late Seventies, he recalled Enright with visible pleasene as a good, kind, and generous man,” Russell Greenwood, ‘Enright's Japan 1953–1956,’ Jacqueline Simms ed., *Life Other Means: Essays on D. J. Enright*（Oxford University Press, 1990）, p. 14.

40）D. J. Enright: *The Monuments of Hiroshima*，寿岳文章，訳注『英語青年』（1954年８月号），p. 441.

41）寿岳文章「私は斯く歩んだ」『高野山時報』1310号（昭和27年８月21日）

42）寿岳文章「洋行はしなくとも」『研究と指導』13巻８号（1980年12月１日），p. 1.

43）寿岳文章「私の歩みと新しいナショナリズム」『不死鳥』第31号（南雲堂，1970年１月10日），pp. 18–20.